

創価大学

➔ SOKA UNIVERSITY

新設「看護学部」を加え、 世界で、また地域の中核で 活躍するリーダーを育む

1971年の開学以来、国際教育、国際交流に力を入れ、グローバル人材・リーダーを育ててきた創価大学。いっぽうで、グローバルな資質をローカルに生かし、地域の中核で活躍する人材も多く輩出している。2013年新設予定の「看護学部」もまた、そうした創価大学らしさを体現する学部になりそうだ。

取材/文・堀水潤一 撮影(表紙)・広路和夫



↑ 創価大学正門。構内には約2500本の桜がある。

最初に2人の卒業生を紹介したい。

1人めは、神奈川県まわたりの小学校に勤める馬渡ふじ香さん。教育学部在学中に半年間、カンボジアに留学し、卒業後は青年海外協力隊員として2年間、中米のグアテマラに派遣された経験をもつ。「高校時代は語学が苦手で、留学など考えもしなかった」というが、世界にはばたけ、という大学の校風に触れ、また、地球規模で起きている環境問題が自分たちと無縁ではないと知ったことで、海外に目を向けるようになった。夢は国連で教育の仕事に携わることなど。そのために今、一人前の教員になろうと奮闘中だ。

2人めは、横浜市役所に勤務する中井彰さん。もともと商社を志望していたが、法学部在学中、アメリカの裁判所で働いたことがきっかけで、自治体で働くことを決意した。「助けが必要な人を支えたい。社会の矛盾から目をそむけたくない」という理由からだ。現在は港湾局に勤務。世界からみた横浜港の位置付けを高めるとともに、1人でも多くの市民が幸せを感じられる街にしたいと考えている。(次ページインタビューも参照)

明るく前向きで、他者を思いやる気持ちにあふれているなど、2人に共通点が多い。経験を通して身につけたグローバルな視野を、地域＝ローカルで生かそうとしている点もそうだ。中井さんは言う。

「グローバルな社会とはいえ、一人ひとりが足をつけるのは結局、ローカルなコミュニティ。そこで、いかに広い視野をもてるかが大切だと思います。同じ日本人でさえ、考え方は人それぞれ。異なる意見に耳を傾けられることも、グローバルな時代に必要な資質だと思います」

“Think globally, act locally”というフレーズや「グローカル」という言葉もあるように、グローバルとローカルは対立する概

念ではなく、補完しあうものだ。

公共政策分野、 地方公務員という選択肢

法学部の「平和・公共政策コース」を担当している土井美德 准教授も言う。「グローバルシティズン(=地球市民)に求められる資質の一つに、異質な他者とコミュニケーションを成立させられる力があると思います。寛容や尊重、相互理解、慈悲など、言葉にすると硬くなりますが、異なる人を受け入れられるということです。その観点から、グローバルシティズンシップを具体的なキャリアに落とし込ん

コラム 創価大学の資格等取得実績

●教員採用試験合格者数の推移

2008年261人、09年256人、10年215人、11年242人、12年233人

●公務員試験合格者数の推移 ※かつこ内は地方公務員

07年29(27)人、08年51(40)人、09年65(48)人、10年53(39)人、11年69(60)人

教職を目指す学生のための「教職キャリアセンター」ほか、「法律教育センター」(新司法試験)、「会計・税務教育センター」(公認会計士試験、税理士試験)、「行政教育センター」(国家公務員総合職・一般職、地方公務員、外務省専門職員採用試験)が、それぞれ学生をサポート。教員採用試験や地方公務員試験を中心に高い実績を残している。

だとき、どんな職業像が浮かびあがるのか。当然、国際機関や外資系企業など、世界を舞台に活躍する仕事があがるでしょう。ただ、世界を飛び回っていないとグローバルではないかという、そんなことはありません。異質な他者とは外国人だけを指すわけではないのです。そう考えたとき、公共政策分野、特に地域社会に貢献する地方公務員は、大きな選択肢となるはず。それは、人に尽くし、社会に貢献するという本学の基本的な考えにも合致しています」

公務員試験が難関化するなか、公務員ガイダンスやフェスタ、公務員ゼミ、公務員試験対策講座などの成果もあり、ほかの難関資格同様、高い合格実績を誇っている。(コラム)

グローバルマインドをもった 看護師を養成

2013年度開設予定の「看護学部」もまた、グローバルな視野を世界、あるいは地域社会に生かそうとする点で、同大学らしさを体現する学部になりそうだ。

最大の特色は、充実した英語教育に加え、海外研修プログラムを用意してい

ること。海外の交流大学での短期研修では、語学教育、フィールドワーク、病院視察、関係者訪問などを通じて、専門性とともに、グローバルマインドをもつ看護師の育成に努める。

「諸外国には、現代の日本とは違う病気・疾病構造があります。例えばアジア各地では、マラリア、デング熱、コレラなどの感染症が重要な疾患です。国により医療体制も大きく異なります。そうした違いを知ることはとても大切なことです」

と話すのは、医療NGO職員としてボスニア、ルワンダ、アフガニスタンなどで医療援助、健康改善に従事し、その後医学博士号を取得した佐々木 論准教授。

「将来、国際協力に携わりたい学生や、海外の大学院に挑戦し、国際機関で活躍したい学生にとってはもちろん、日本の医療機関で働くにしても、地域医療やコミュニティの健康維持を支えるうえで、広い視野は必ず生きるはず」

真のグローバル人材は 活躍の場を選ばない

一昨年から全学で、土井、佐々木両准教授も担当するGCP(グローバル・シテ

イズンシップ・プログラム)が始まっている。国際機関、海外大学院、国家公務員、国内外の一流企業などをを目指す学生を全学部から募集し、学部のカリキュラムに上乘せしたカリキュラムを4年間にわたり展開するプログラムだ。徹底した語学教育や数理能力トレーニングのほか、少人数ゼミや海外研修を通じて、真のグローバル人材を育てていくことになる。

「海外研修を終えた直後、ある学生は、『言葉や文化を超えて、人々は仲良くなる』という感想を残しました。シンプルな感想ですが、このことを肌で感じられたかどうかは、今後の人生を大きく左右すると思います」と佐々木准教授。

●
海外に留学する学生は年500人以上。46カ国・地域、135の大学と学術交流協定を結ぶなど、グローバルな大学として知られる創価大学。

こうした環境で身につけた語学力はもちろん、リーダーシップや課題発見・解決力、さらには他者を受容し、社会に貢献しようとする気持ちこそ、グローバル人材に求められる資質であり、それがあれば、世界であれ、地域であれ、活躍の場が問われることはない。

OG・OBインタビュー



馬渡 ふじ香さん
(相模原市立富士見小学校勤務)

2005年、教育学部児童教育学科卒業後、青年海外協力隊として2年間、中米グアテマラで活動。帰国後、名古屋大学大学院博士前期課程修了。2011年4月より、公立小学校に勤務。

50・60代のとき世界で活躍するために

外国の洪水のニュースを見て、ふと、「援助の名のもと、日本が大量に木を伐採していなければ…」と罪悪感を抱いたことが、海外に目を向け、卒業後2年間グアテマラで環境教育に携わることになった最初のきっかけです。現地では「僕らは資源を無駄使していない。温暖化も先進国のせい」と言われ、答えに窮したこともあり。豊かな社会は多くの犠牲の上に成り立っているという矛盾を実感し、感謝の気持ちとバランス感覚をもたねばと痛感しました。将来は、教育を通じて途上国の支援をしたい、国連で働きたい、博士課程で研究もしたい。それにはまず教育現場で実践を積み、専門性を磨くこと。50・60代になったときに力が発揮できるよう日々仕事に打ち込んでいます。



中井 彰さん
(横浜市役所勤務)

2010年、法学部法律学科卒業後、横浜市役所に勤務。在学中1年間アメリカに留学し、シアトルの裁判所でインターンシップを経験。現在、港湾局で経理関係の業務に携わる。

地域社会とかがわることが自分の道

アメリカ留学中、裁判所で2カ月間インターンシップを経験しました。私が担当したのは、軽微な犯罪を繰り返す人に福祉情報を提供することで自立を支援する窓口です。「仕事がない」「家がない」「病気を煩っている」など、問題を抱える人に寄り添い、話を聞くうち、「力になりたい」という気持ちが込みあげてきました。時に感謝の言葉もいただき、人のために働くことの意義も知りました。社会の縮図を経験し、やりがいを見つけた以上、何らかの形で地域社会とかがわることが自分の道。それが商社から地方公務員に志望を変えた理由です。留学で身につけた、価値観の違う人々を理解し人間関係を築く力。これは、多様な意見をまとめる必要がある今の業務にも生かされています。

Interview!!



看護は人の希望となる職業。 人のために尽くしてほしい

④ 学士課程教育機構 佐々木 論准教授

日本では、子どもは安全に産まれて当然という雰囲気があるが、子どもを産む際には、さまざまなリスクがあること。

私たちが当然のように享受している医療サービスは、海外ではまったく異なり、そのなかで、多くの医療関係者が人々の健康改善のために頑張っていること。

世界が抱えている健康問題の根底には、貧富の格差が大きな要因としてあること。

来年度、開設に向け準備を進める看護学部において、私が担当を予定している「国際保健」や海外研修では、こうしたことを学生と共に肌で感じ、学びたいと思います。これまで抱いていたであろう医療観、健康観が広がるような授業を目指します。

グローバルな活動を地域に生かす

日本の医療が進んでいるとはいえ、外国から学ぶべき点は少なくありません。以前、私が

アフリカやアジアで健康改善に従事していた際、コミュニティに入り、生活習慣を変え、地域全体を健康にしていこうという活動をしていました。こうした住民参加型のエンパワーメントの手法は、日本においても有効な取り組みになると思っています。日本で住民参加という場合、行政が住民の意見を聞き、それを政策に反映するという流れが普通です。けれど、本来の住民参加とは、住民自らが計画を立て、実施し、地域を変えていくもの。行政に頼るのではなく、イニシアチブをとるわけです。

グローバルという言葉でも表せますが、ローカルな活動にグローバルな視野が必要であるのと同様、このように、グローバルな活動を通して得た先進的な技術をローカルに生かすこともまた大切なことです。

希望を与えられる職業

「英知を磨くは何のため」という創立者の言

葉があります。学んだ知識、身につけたスキルを卒業後、人々のため、社会のために活用するということです。

その点、看護は人々の健康を守り、病気を治療するという、まさに人のために尽くす仕事であり、建学の精神を具現化できる仕事です。

24時間体制のシフトや、人の死に直面するなど、肉体的にも精神的にも負担が大きい職業であることは事実です。私も、紛争地域や貧困地域で、無力感、孤独感に何度もさいなまれました。それでも、1人でもいい。自分がしたことに対して、「うれしい」と感じてくれる人がいれば、それだけで仕事を続けていく励みになります。

看護は、人が生きていく希望につながる仕事。そうした喜びと誇りを生涯もち続け、1人でも多くの人に、希望を与えてほしいと思います。

公務員の表情はさまざま。 豊かな公務員像を描いてほしい

行政教育センター長 法学部 土井美徳准教授 ④



法学部の「平和・公共政策コース」では公務員志望の学生を対象に「公共政策プログラム」を組んでいます。そこで4年間学んだ学年が今春それぞれの道を歩みだしました。

留学中、内戦後の国家の状況を目の当たりにしたYくんは、国連職員を目指し、東京大学公共政策大学院に進学しました。コロンビア大学公共政策大学院にもダブルディグリーでの入学が決まっています。

Hさんは、環境政策を通じて故郷の街づくりをしたいと地元の政令指定都市に就職しました。Mくんも地域振興を通じて元気な大阪を作りたいと、地元に戻りました。

Tくんは、かつて生活保護課で働いていた父親の疲れ切った姿を見て育ったことから、公務員には絶対にならないと考えていたそうです。しかしインターンシップで知った生活保護課の実態、すなわち、感謝されることは少ないかもしれないけれど、最後のセーフティーネッ

トとして住民を支える尊い仕事だと知り、住民に密着したいと、父親同様、東京特別区で働くことを決めました。

公務員像を豊かに描いて

公務員とひと口にいっても、いろいろな表情があります。Y君のように世界を志す若者もいれば、中央省庁で公共政策の在り方を追究したいと考える人や、地元で貢献したいと思う人もいます。

学生には、公務員像を豊かに描いてもらいたいと思っています。自身の生い立ちや、留学やインターンシップなどの経験。学びのプロセスや、卒業生との会話。そうした中から紡ぎ出されていく、豊かな公務員像を大切にしてもらいたいです。

そうやって自ら獲得したフィールドではばたいたとき、「地球市民」「社会貢献」といった、

ともすれば抽象的な言葉が、リアリティをもって語られることになるでしょう。

人に尽くす喜びが支えに

学生時代は可能性に満ちています。挫折も不本意な経験もすべてが、キャリアの作りこみの材料です。良いことも悪いこともすべて可能性に変わっていくことでしょう。

社会にいれば、常に問題にぶつかります。多くの場合、答えは用意されていません。だからこそ、そこで試行錯誤をし、乗り越えていくだけの力をつけたいと思います。

そのとき思い出してほしいのが、何のために働いているかということ。家族のためなのか、地域のためなのか、目の前の人のためなのか。いずれにしろ、誰かのために尽くしているという気持ちが、喜びになり、やりがいにつながるはずだ。